造林事業の省力化への取組みと地域への普及

地域課題の解決に向けた取組

網走西部森林管理署
西紋別支署

北海道国有林の多くの人工林は、現在主として間伐期を迎えており、今後は高齢級化が進み、主伐の急激な増加が見込まれます。

網走西部流域の国有林においては、平成26年度を始期とする森林計画において主伐面積が増となりましたが、民有林を含む地域全体では大きな増とはならないものの、事業量においては今後も一定量が確保される見通しとなっています。

一方、造林を主体とする事業体では高齢化が進んでおり、伐採後の再造林には労働力不足が深刻な状況にあり、新規就労者の確保、再造林の省力化と低コスト化が課題となっています。

これらの要因としては、苗木の植栽や植付後の下刈の作業は機械化が進まず人力となること、また、作業適期が一時期に集中し通年雇用の確保が困難な状況にあること、更に、コスト面では木材価格の低迷により、再造林意欲が低下していることなどがあげられます。

苗木の植栽作業

こうした状況で、林業が産業として循環し、新たな世代の人工林造成を確実に行っていくためには、現状と向かうべき方向性等についての、地域の理解が必要であり、平成27年度には市町村の実務者が集う実行管理推進チーム、林政連絡会議等において、当支署から説明を行い認識を共有してきたところです。

紋別市林政連絡会議

また、当支署において、地域の木材関連事業者が集い意見交換を行う「西紋地区林業・林産業に関する懇談会」において意見交換会を実施し、従来の様な木材供給量や価格に関する話題のほか、新たに苗木量産化の必要性などの意見も出されるようになり、地域全体で取り組んでいく方向性について合意が得られたところです。

現在、当支署では低密度植栽について重点的に取り組んでいます。

今年度においては、低密度植栽試験地を設定し、ha当たり植栽本数を千本から二千本まで4区分し、更にコンテナ苗と普通苗植栽の区域を設定しました。

この試験では、低密度植栽による苗木の成長への影響、保育（植付・下刈）の工程への影響や問題点、侵入した広葉樹の成長量や取扱方法との関係について把握し、追跡調査により除・間伐等も含めた施業トータルの効率性と労働強度低減を検証することとしています。

コンテナ苗

今後は、国有林で進めている伐採と造林の一貫作業システムや、低密度植栽試験地の紹介を通じて、低コスト化への技術情報を発信したり、関連機関と試験地を視察し、私有地の無立木地への低密度植栽の可能性なども含め、多面的な視点で低密度植栽を検討したいと考えています。